

高等教育の国際化における研究・教育の価値への支持： 行動への呼びかけ

目的

この文書は、高等教育の国際化は真に有益であること認めるとともに、潜在的に意図しない逆の結果が生じる恐れがあることについて、注意を喚起するものである。

私たちの視点は、国際化が良きものであり、当該の高等教育機関とそれに関連する国々の双方にとって有益な結果がもたらされるよう行動しなければならないと高等教育機関に警告することにある。

国際化—進化しつつある概念

1 高等教育の国際化は、国際化が出現する国際環境によって形成され、再形成されるダイナミックな過程である。この環境に変化が生じると、国際化の目的、目標、手段、戦略に変化が生じる。過去半世紀を通じて、世界は、植民地覇権の消滅、冷戦の終結、新しい経済パワーの台頭、新しい地域的同盟の結果、劇的な変化が生じた。

2 グローバリゼーションは、今や、高等教育の国際化を形作るもっとも重要な環境要因である。グローバリゼーションは、国家間の相互依存によって特徴づけられ、経済、政治、社会、文化、知識のそれぞれの分野で明白な事実である。グローバリゼーションの中心には、物、サービス、人の移動の活性化と、時間と空間を前例のないやり方と減少しつつづけるコストで橋渡しする情報とコミュニケーション技術の加速化がある。

3 グローバリゼーションは、私たちの生活、地域社会、職業のあらゆる局面に国際的な次元を付与する。高等教育において、それは、アイデアと学生と大学教員の移動を活発化し、協働と知識の世界的な普及の可能性を広げてきた。それはまた、国際化と関わるあらたな目的と活動と行為者を導入してきた。

4 世界の異なった空間と時間で、大学や国や地域は、異なったやり方で高等教育の国際化プロセスに参加し、様々な目標を追求している。植民地支配のアフリカの例では、高等教育へのアクセスは、宗主国にある大学に行くために外国旅行をすることを意味していた。あるいは、国際的に協調した改革を通じてヨーロッパの高等教育の形を抜本的に変えつつあるより最近のポーランド・プロセスは、国際化が異なった目標を充足させ、異なった成果と課題をもたらすことを示している。

5 国際化の目標は、地球市民の育成や研究能力の育成から留学生の授業料収入の獲得や大学の威信の向上への志向にいたるまで、継続的に進化し続けている。海外のブランチ・キャンパス、世界全体をカバーする遠隔地学習プログラム、国際教育のハブやネットワークなどの新しい形の国際化は今や、学生と教員の移動、カリキュラム変革や研究と教育の国際的な大学連携などの伝統的な戦略を補完している。あらたな組織プレイヤー、たとえば民間セクターの（プログラム）プロバイダーが、この分野に入り込んでいる。

6 世界の特定の地域では、頭脳流出の危険性が深刻な問題として残っているが、別の地域では、留学生の移動を自分たちの高等教育の拡大と能力の向上に利用している。政府や高等教育機関によっては、散らばりつつある才能ある人々の頭脳循環を確かな物にするために、彼らと公的なつながりを作っている。

る場合もある。そして、国際的に不平等な才能の流れは、長期的には、結果としての問題性を含むが、広い範囲で多くの国々が能力を自国で育てて彼らに機会を与えることで、その最悪の影響は減少させることができる。高等教育の国際化は、そのような能力育成と機会提供を広く世界中で行うことによって、主要な役割を果たすことができる。

7 要約すると、今日の国際化は、20世紀の前半や1960年代や1980年代とは明らかに異なっているのである。高等教育の国際化の推進者の広範囲化は、国際化を高等教育機関にとって至上命題とすることの効果をもたらした。大学の根本的な核となる価値とミッションを保持しながら、多様な意図された結果のバランスをとることは、困難ではあるがチャンスでもある。国際化は、抜本的に新しい、複合的で、文化史、グローバル化された環境の中で生じつつある。目的と行動と行為者の結果としての変化は、用語と概念枠組みと過去どのように理解されてきたかを再点検することにつながり、より重要なこととして、国際化の価値と目的と意味のより強く求められるが健康的な問題設定につながってきたのである。

グローバリゼーションの脈絡の中での国際化の特徴の変化

8 国内あるいは国家間での環境の違いはあるが、世界中のどの高等教育機関も国際的な活動に従事しており、それを促進しようとしている。世界と関わることは今や質の高い教育と研究の定義の一部になっている。

9 国際化がもたらす多くの永続的な学術的効果は当たり前のものとして広く認められている。以下はその中でもっとも注目すべきものである。

- ・研究のみならず教授学習の質の向上
- ・国家的・地域的・地球的課題とそれに関わる主体とのより深い関わり
- ・国民として、地球市民として、さらには生産活動の積極的な従事者として学生をよりよく鍛えること
- ・学生の母国では存在しないかほとんど希少なプログラムに学生を参加させること
- ・教員に対してより優れた研鑽の機会を提供し、異動を通じて「閉鎖的な研究者育成」の危険を避ける
- ・国際学術ネットワークに参加し、国内外の喫緊の課題について調査を行い、世界の国々から専門知識や将来への見通しから示唆を得る
- ・国際的なグッドプラクティスを視野に、当該大学のパフォーマンスを位置づける機会となること
- ・国境を越えた経験の共有を通して大学の政策形成、学生支援、アウトリーチ、質保証の改善が可能であること

10 同時に、国家的、地球的規模で、高等教育の新たな世界は威信や資金をめぐる競争によって特徴づけられている。国内的、国際的なランキングは、大学のランクを上げることに重点を置いた政策と行動に駆り立てている。多くの大学では、国際化は今や、威信と競争力と収入を向上させるための戦略の一部となっている。高等教育がいくつかの点でグローバルな「産業」となるにつれて、高等教育の国際化は、商業的なあるいはその他の利害関係が高等教育の根本である学術的なミッションと価値に悪影響を及ぼす競争に投げ入れることもある。競争は、国際化の土台である協同を覆してしまう恐れがある。

国際化の不都合な結果

11 高等教育の国際化が進化し、その重要性が増すにつれて、その過程の潜在的に不都合ないくつかの結果が見えはじめた。その中には、いくつかの大学にとっての特定のリスクや不公平な利益あるいは平等でない権力関係がある。以下は、しばしば指摘される課題である。

- 共通のコミュニケーション手段をもつことは有利であることは当然であるが、英語の普及は、高等教育で教えられ使用される言語の多様性を減少させることになる可能性がある。英語が広範に使用されることはしたがって、文化の均質化につながり、理解されてはいるのだが不都合な結果を解決することが困難になることにつながる。
- 国際競争は、質の高い高等教育を作っている大学のモデルの多様性を減少させるかもしれない。通常、研究の卓越性によって狭く定義される「ワールドクラスの大学」という概念によって具現化される単一の卓越性モデルを追い求めることは、限りのある国の資源を少数のあるいは単一の大学に集中させることにつながる可能性があり、それは多様な国家的目標にふさわしい高等教育の多様性にとっては有害なものになりうるかもしれない。この危険は潜在的にはどこにでも存在しているが、とくに途上国にとっては深刻である。
- 頭脳流出は持続し、より加速していくかもしれない。そしてそれは、途上国と途上国の大学が繁栄と文化的な前進と社会の幸福に必要な才能を保持する力を削いでいくことにつながる。
- 問題のあるそして非倫理的でもある方法を用いての大規模な留学生の獲得は、時として、頭脳流出のような様々な問題を生じさせる。また、多くの留学生の存在は、国内の学生の機会の減少につながるとする誤解や、外国人に対してのいわれのない差別の拡大につながる可能性もある。このことは、留学生が学び生活する教室やキャンパスやコミュニティにもたらすとてもすばらしい知的・異文化的恩恵に影をさす可能性がある。
- トランスナショナル・プログラムや（海外での）分校の設置は、長期的に受け入れ国の教育力をいかに強化できるのか、あるいは大学がその母国で行っているのと同等の教育を提供することができるのかということを含めて、数多くの疑問を投げかけるものである。威信が認められている外国の教育機関の存在は、国のニーズに応えようとする現地の高等教育機関に不利な状況をもたらす可能性がある。受け入れ国の中には、外国のプログラムの存在と活動と質の面で困難を経験している場合もある。
- ランキングに刺激されて国際的な名声や国際化の目標の重要性を得るために外国のパートナーを選択する際に、現実的な協力への関心よりも関係をもつことによって生まれる威信を求める傾向があるように思われる。そのような傾向は、国際的なパートナーの獲得について多くの重要で質の高い大学を除外してしまう危険性をはらんでいる。
- 開発と国際化戦略実施のための資源を持っているか否かにもとづいた大学間の非均整的な関係は、資源をもったよりよい大学の目的遂行に有利となり、その恩恵に大きな差が出る結果につながる可能性がある。

このような不都合な結果はいずれも、高等教育の国際化の固有の価値について疑問を投げかけるものではない。逆に、高等教育機関におけるこれらの潜在的なリスクについての配慮という目標が存在することで、それらを避ける行動がなされることを確かなものにするのである。

国際化の価値の確認：高等教育機関への呼びかけ

12 国際化の恩恵は明らかである。しかしながら、どのような高等教育機関でも、潜在的かつ不都合な結果を避けるあるいは縮減するためにできるだけ努力を払う必要がある。

13 この文書に叙述した高等教育の国際化環境の普遍化は、あらゆる高等教育機関に、国際化に内在する価値や原則や目標を再度点検し確認する必要性を求めている。それらの中には、異文化間学習、大学間協力、互惠、連帯、相互尊重、公正なパートナーシップがあげられるが、それだけには限らない。国際化はまた、国際化の実践とプログラムが学術や財政や威信や他の目標についてうまくバランスをとることを確かなものとする行動的で協調的な努力が必要とされる。それは、どの大学にも責任をもった地球市民として行動し、アカデミックな一体性、高い質、平等なアクセス、互惠という価値に裏付けられた高等教育のグローバルなシステムを構築することに努めることを求めるのである。

14 国際戦略をデザインしそれを実行するにあたって、高等教育機関は、以下にのべる価値と原則をもって、それを実行することが求められる。

- ・学問の自由、大学の自治および社会的責任
- ・入学と評価の公正さおよび差別のないこと
- ・科学的一貫性と研究倫理の固執
- ・国際化への努力の中心に、学生の学習、研究の発展、地域との関わり、地球的課題などのアカデミックな目標を置くこと
- ・圧倒的大多数である留学生以外の学生もまた、国際化の恩恵を受け、彼らに必要なグローバルな能力を獲得することができるように教育課程と教育課程外活動の国際化を追求すること
- ・直面する地球的課題を解決するため、研究と学習と行動の国際コミュニティを形成するという前例のない機会に関わること
- ・パートナーシップの土台としての相互の恩恵と尊敬と公正を確認すること
- ・留学生と外国人研究者が大学と関わるあらゆる局面で倫理的にそして尊敬をもって接すること
- ・資源の有無を超越し、国家にとらわれずに人間と大学の能力を高める革新的な協働の形を追求する
- ・外国で仕事を行う際、文化と言語の多様性を保持・推進し、地域住民の考えと行動を尊重すること
- ・意図的か無意図的か、あるいは肯定的か否定的かはともかく、国際化の動きが、他の高等教育機関にどのような影響を及ぼすかに関して、継続的なアセスメントがあること
- ・基本的な価値への配慮を外国の大学や文化との関係を円滑にするための現実的な解決方法に結びつけて、多様化を尊重し促進しながら模索し、国際的な対話を通して、新しい国際化の課題に応えること

15 これらの価値はスローガンでも曖昧な抽象的言明でもない。それらは、非常に具体的に大学の政策と行動に適用しなければならない。大学が国際戦略を展開するにあたり、何故大学は特定の国際戦略を企図し、それがアカデミックミッションと価値にどう関連し、悪い結果を避けるためにどのようなメカニズムが作られるべきかについて、明白かつ透明でなければならない。急激な変化、複雑な現実、次第に強まっていく競争への圧力、資源の不足、このような環境の中で、大学や諸組織内外および政府とのオープンな議論は大学の根本的な目的や原則を最前面に出して行うべきである。

次の段階

16 高等教育機関へのこの呼びかけは、メンバー団体や国際教育組織やパートナーと国際化の組織的ガイダンスやよい実践（グッドプラクティス）の例を提供するための協働を行う約束の最初の一步でしかない。IAUは今後、大学がこれらの原則と価値を毎日の教育実践に具現化するための援助を行うことになるであろう。

2012年4月